地域愛称マップ

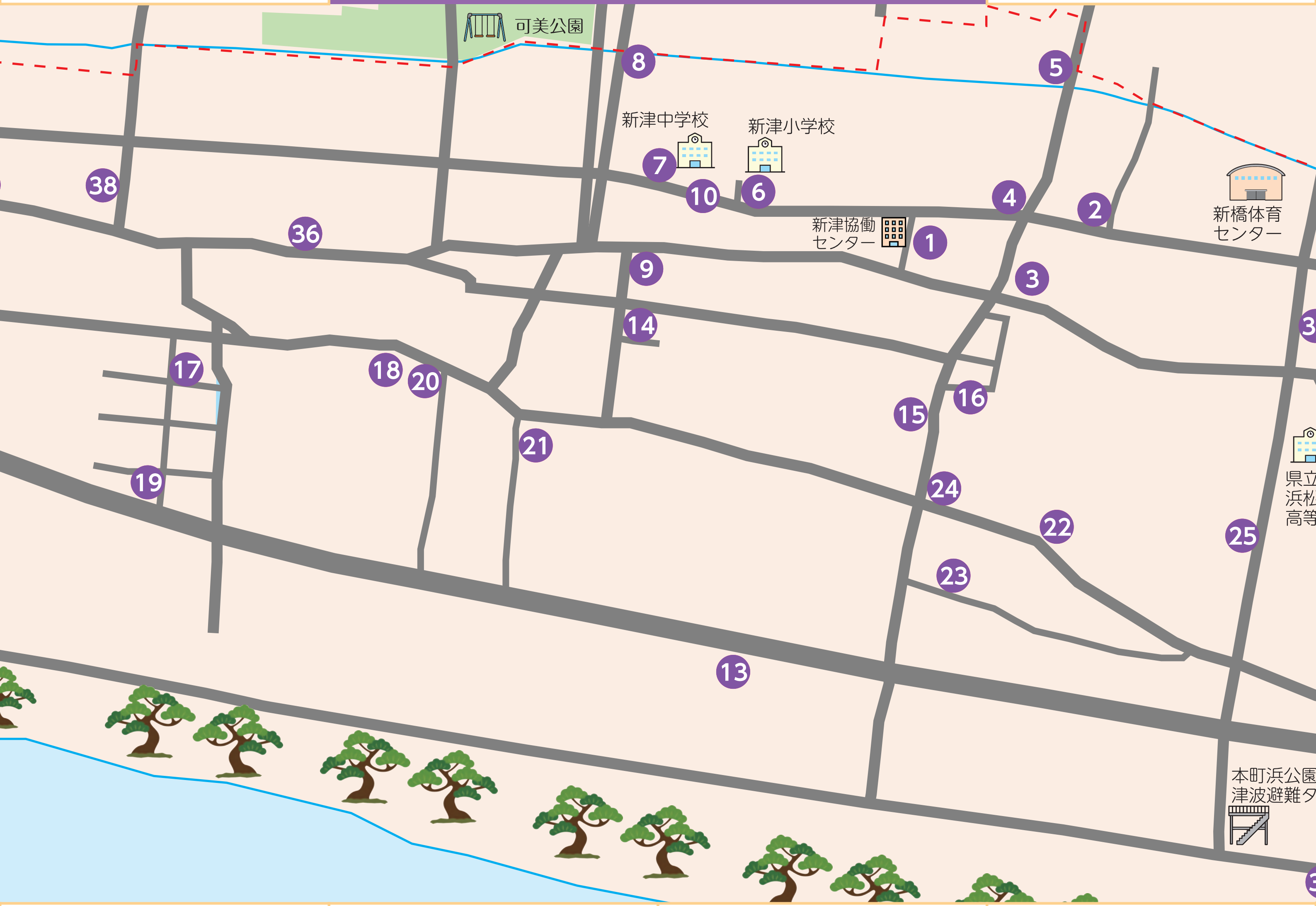
しんづ 新津地区

15 御前道（ごぜんみち）

東若林町から米津浜に至る当地域の重要な道路であったため、昔から御前様（尊い人）のお通りになる大切な道路であると伝えられ、地域の人々が維持管理に特に務めてきた。戦時中は浜松高射砲連隊の米津浜演習場に通じる唯一の道で、「高射砲道路」とも言われていた。また、幕末に浜松藩によって築造された御台場に通じる道路として「お台場道」とも言われている。

16 狐山（きつねやま）

堤町の東端に松の木と雑草の生い茂った森があり、昔から人々に畏敬されていた場所に狐が棲み着いていたため、狐山と呼ばれていた。1500 年前には海であったと考えられていたが、古代の土器が発見され、人間の居住が立証されたことは画期的な出来事で、狐山は重要な遺跡であるといえる。



17 松引き川（まつひきがわ）

昔、ある秋の日に一羽の鶴が降り立ち、くわえていた松の苗をこの川の水に浸して飛び去ったという。鶴によって小沢渡町の大東院という寺まで運ばれた松は、そこで庭掃除をしていたおばあさんが植えて、いわゆる「音羽の松」として有名になった。付近に残る字名「大池」「小川」「大川」「堤北」などから察すると、この辺りはかつて湿地帯であり、大雨が降ると川になるようなところだったようである。

18 辻地蔵通り（つじじぞうどおり）

旧浜松西農協倉松出荷場付近には寿福寺の火葬場があり、そこに通じる道の入り口に地蔵堂があった。この地蔵堂の地蔵菩薩は、寿福寺の住職が 1800 年ごろ野辺の送りの道中に安置して、大衆の教化をはかったものである。その際、海岸の小石を拾ってきて、経文を書き、周囲に置いたりしたが、途中から松かさを置くようになった。また、「いぼ」のできた人が一心にこの地蔵に拝んだところ、いぼがとれたと人々の間に伝わり、今は「いぼ地蔵」の名で親しまれている。

19 瓦ヶ塚（かわらけづか）

倉松は古来、倉庫を中心としての産業で繁栄を極めており、各戸 2 棟以上の倉庫をもって幸福に暮らしていたが、文亀 2 年（1502 年）の大汐（津波）のため、廃墟と化したという。津波に流される以前の倉松には土器町（どきちょう）があったとされ、瓦ヶ塚は土器の生産現場か、廃棄物の集積場と考えられる。「かわらけ」とはうわぐすり（釉）をかけない素焼の陶器のことで、昭和 30 年代ころには破片がこの辺りの畑から出ていたという。また、一説には難破船が打ち上げられた跡ともいわれる。

20 大川通り（おおかわどおり）

かつて、倉松の集落の南に堤があり、西から東へと川が流れていた。流れは大川から小川そして大池に入り、大池から米津港方面に流れていたという。字名「大川」も、ここから伝えられたと思われる。なお、大川通りは、新田に通じる唯一の道路であり、「大川端」の地名も残っている。